



Title	「びっくりする」ということ : 驚きの反応形式
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	哲学論叢. 1988, 19, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「びっくりする」ということ

——驚きの反応形式——

近 藤 良 樹

一 凝 視

驚く時、人は、その対象を新奇で強烈なものと判定（認識）し、¹且つこの判定に固有の反応・態度（実践的構え）を続けることになるが、ここでは、この驚きの反応・態度について見ていきたいと思う。驚くべきものは、新奇なものとして、意識を引き付けてやまず、「眼を見張らせ」凝視を誘うのであり、さらに他方では、突然強烈に襲ってくるものとして衝撃を与え「肝を潰して」心身をショック状態に陥れるのであって、驚きの反応は、私見によると凝視とショックを二大特徴とするのである。また、これに伴うものとしては、呆っ氣にとられての忘我性、身構えが決まらないでうろたえる動転などを見出すことが出来るのである。以下、驚きの態度を、この凝視・ショック・忘我・動転の四つの側面から検討することにした。

1
まずは、凝視からであるが、驚きの外見（表情）に一番特徴的なことはいえ、何と言っても、大きく見開かれた眼であろう。新奇なものから発せられる情報を見逃すまいとばかりに、「眼を見張って」身構えるのである。

意識を驚きの対象に集中しているのである。ギリシャ語で哲学へと鼓舞する「驚き」は、*baizua* で、それは、*baizua* (見ること) に由来する。我々の「あきれる」という驚きは、今では愚かしいものに限定されて使われるものであるが(また、正しい語源の存処がどこにあるのかは知らないが)、眼を丸くあげひろげる状態を連想させる言葉である。漢字でも驚きを意味するものに、驚や愕などとともに、目に目、目に申を並べた漢字もあり、眼に驚きを象徴させて「目を見張る」ことを表現するものもあるようである。

眼がそうであるように、驚きを与える対象に、人は、感覚や知性の認識能力を全力でもって集中・動員させられ、注目させられるのである。他事については、それをやりかけたまままで突如停止し放擲して、入ってきた「ウナ電」を最優先させるのである。他事に関しては全てを麻痺状態に陥れてまで、全体制・全エネルギーを驚きの対象の注視に注ぎ込むという「緊急体制」を作り出すのである。耳目という、情報の受容器官を驚きの対象にと向け直し、眉をつり挙げて額に皺をつくるまでに大げさに眼を開き、聞き耳を立てるのである。そして、これにともなって口を聞くこともしばしばである。ダーウィンのいうように、人の驚きに開口の伴う理由の一つは、鼻からの呼吸より口でする方が雑音が少なくなるということにあるのである。犬が口を開いてハーハーいっていても驚くと逆に鼻で静かに息をし始めるのと同じで、主目的は恐らく呼吸音の消去にあるのである。⁽²⁾「ハッとすると」驚きは、文字通り一瞬、呼吸(音)を止め(危険が感じられるものの場合、ハッと息を吸い込んで後に、そうでないものの場合、直ちに呼吸停止し)雑音を少なくして、耳を澄ますことであらう。「ハッとすると」場合、時に手を開いた口を持って行き、口をふさぐという行為に出ることがあるが、それは、驚愕にせよ驚喜にせよ、その対象や周りの人にこちらの存在や驚いている状況を知られたくない場合になされるもののように、多分、驚きの声(純粹な驚

きよりは、驚きに伴う恐怖や喜悲等が伝達を求めて声になるのである）の漏れるのを防ごうということではなされているのである。口での息をふさぐのではなく、声の出ていくのを防ごうというのであろう。

ところで、驚きが注意集中の態度を惹起するということは、それが我々の意識を喚起することには他ならない。我國の「驚く」という言葉には、古くは「眠りから覚める」という意味があったようだが、眠り（無意識）という無から覚醒（意識）という有への、「目覚め」への飛躍は、たしかに驚きであろう。目覚めとは、自己のうちに閉じ籠もって、客観世界に関しては無の状態から、これと全く異質の客観的世界の有の只中に突然ほうり込まれることであるから、無から新奇な有への無媒介的な飛躍である驚きと同じ構造をもつことになっているのである。「眼が開く」とか「起きる」とは、覚醒の身体的表現で、覚醒そのものの心的な内容は、「驚き」がふさわしいのである。

この「目覚めとしての驚き」をもって、人は意識を取り戻し「意識的」生活を再開するのであり（目がさめるとは、熱や酔いがさめる、というように、昨日と同じ自分に、その元の状態に戻ることをいうのであろう）、この意識の持続の中で、さらなる目覚め、高次の意識化として狭義の驚きが喚起されるのである。我々は、覚醒していても習慣化された日常性のもとでは、半ば眠っているのであって、無意識（＝無視・不注意）に留まっており、驚くとは、この無意識からの意識への飛躍、意識（注意）の喚起に他ならないのである。朝、眠りからの目覚め（＝驚き）で、心身が停滞から活動状態に高められるように、覚醒下での、意識集中としての驚きは、我々の心身を怠惰な惰性状態から脱出させる覚醒剤となっているのである。いわゆる驚きは、目覚めの目覚めであり、意識の意識化なのである。目覚めで開いた眼を、驚きは、さらに開かせるのであり、瞬きという瞬時の眠りも否定して、「眼を

見張り」「眼を丸くする」という覚醒の覚醒を作り出すのである。

自身のうちに閉じ籠もった眠りの主観的で個人的な世界から、目覚め（驚き）は、間主観的で共同的な、自身にとり超越的で外的な客観世界へと人を引きずり出すのであり、さらに狭義の驚きは、日々の連続的で周知の、各人に共通の親密な客観世界の持続の途中で、覚醒した意識のさらに彼方において疎遠で未知のいわば超客観的な世界へと、もう一段外へと、意識を引きずり出すのである。朝のめざめでは、昨日と同じ世界と自己に戻る（さめる）のであるが、この点では、驚きは全く異なるのであって、突如として、全然未知の疎遠な世界へと拉致されていくことになるのである。

注意集中は、意識の一般的な在り方であるが、驚きのそれは、さらに、驚きの対象への意識の固定がともなっており、この注意集中は、言わば「凝視」となっているのである。能動的自主的な、いわゆる注意・注目の場合には、自在に出来事に対処して注視すべきものも変えていけるのに対して、驚きの注視は、その対象を変更することが出来ないものである。驚く者は、その対象に捉えられて、それにのみ意識を固定しなくてはならないのである。スピノザが、驚きを、精神が一定の表象に縛られて、その注視にと「引き留められ」ていることだと定義しているように⁽³⁾、我々は驚きの注視・注目に際しては、不随意的な凝視へと強制されているのである。

人の意識は、その表象を次々とかえて本来少しもじっとして居ることが出来ない根っからの粗忽者なのであるが、これが、驚きでは、不動を強制されて、釘付けになって、その本性に反してじっと一つのものを見続けるのである。驚き・凝視する意識は、新奇で強烈な印象を自身のうちに時間をかけてしっかりと焼き付けようとしているのである。新奇な表象は、スピノザの言うように既知の他の表象との「結び付き」がないのであって、これを自身の⁽⁴⁾

既知の知識体系に組み込むには時間がかかるのである。意識は表面の動きを停止して、その本来有する活動力を、驚きの表象を取り込む、既知の体系の再編作業という隠れた部分に集中しているのであろうか。

それともこの凝視は、単なる意識活動の停止に過ぎないのであろうか。驚きには、強烈さのショックによる麻痺の伴うことも多く、行動への麻痺として不動の状態が作りだされる。しかし、これらの不動・麻痺が、驚きの注意集中のうちにまで入り込んでいるとは思われない。驚きの注視では、確かに他のことは全くお留守になっているのであり、それに関する活動は端的に停止しているのである。が、この場合、驚きの注視自体が、その凝視の間、麻痺し停止しているのだとすると、注視開始以後の変化は捉えられないことになるけれども、その変動があればこれを捉えているのが普通であって、しっかりとその動向は見続けているのである。流れ星に驚く者はそれが消え去るまでしっかりと見定めているのである。驚きの凝視は、恐らく、驚きをもたらすものに固定された可能な限りの注意の集中なのであり、意識の（受容の）活動はそこでは活発なものではないか。ショックが凝視の機能にまで入りこむ場合は、当然、凝視もなくなるのであるが、そうでない限りでは、しっかりと見続けるのである。

とすると、その凝視がなんとなく意識活動の停止を感じさせることがあるのは、凝視自体がそうだからではなく、第一には、凝視によって空白にお留守になった、他事に関する意識活動とか、驚きにおけるショック・麻痺のメントによってそうなっているのだと言わべきであらう。また、第二には、意識は、本源的に、活動し続けるもので、あちこちへと粗忽な動きを繰り返し、いわば微動を続けているのであるが、この微動は、確かに驚きによって停止しているのであり、そのことも活動の停止を感じさせるのかも知れない。が、微動しないことは活動しないことは別である。能動的な注視は、他へと微動することなく一点に意識活動を集中していることを言うのである。受動

的注視という驚きの場合もこれと同じだといって良い。それは、通常の微動の何十倍もの激動がそこに生じて粗忽な微動の欲求エネルギーを全て吸収しているので、意識は十分に欲求を満たしてそれに浸り切り（＝凝視し）、動く必要がなくなっているという事態なのであろう。第三には、能動的注視と違って、驚きの場合、分析し想像を加えるといった能動的な活動を全然しないことも挙げられよう。後で振り返って、意識の停止を感じるのは、この能動的分析の欠如あたりによることが大きいのではないか。

この驚きの注意集中・凝視は、さらに、受動的であることをもって特徴づけられるのである。注意・注視といったものは、普通は意識の自発的活動なのであるが、驚きの注意集中は、意識が自主的自発的になすものではなく、我々は、そのようにと強制されているのである。受動的な注意集中なのである。自身の意志で自由に能動的に凝視している（即ち、見る）のではなく、凝視させられているのである（見させられている）のであり、見えているのである）。朝の目覚めという「驚き」は、これを意志して自覚的に行えるものではない。ふと目覚めるのであり、起こされるのである。それは、受動的に、外界が見える状態になることである。覚醒後の驚きも、予めこれを意志し構えてそうするのではない。自己から独立の何かに奇襲されなくてはならないのであり、そこに成立する凝視は、自在な注視（能動的な見る状態）ではなく、驚きの対象にのみ眼が固定され凝視が強制されているのである。意志の方面からいうと、これが欠けているのであり、目覚めの場合と同じく、驚きの凝視でも、「見える」という受動的状态にあるのである。目覚めの驚きで客観世界全体が見える事となるのに対して、驚きでは、さらに驚くべきものが集中的に見える状態になるのである。

能動的意志が端的に欠如していて、受動的になっているのだが、凝視を強制されるといっても、この私が凝視し

ているのであり、驚くべきものが外から眼をこじ開ける訳ではない。意志は働かないが、非意志的なレベルでは、精神は驚きの対象を全力でもって把握しようとしているのであり、だからこそ、振り向き、自身の眼を大きく開き凝視するのであって、このレベルでは極めて能動的なのである。意志し反省する自己の意識は、そこでは働いていない、つまりはその限りでは受動的なのであるが、本能的といわれるようなレベル・無自覚的に働く精神の領域からいうと、非常事態に緊急体制をとって、新奇で強烈なものの情報を可能な限り取り込もうと、極めて、能動的になつてゐるのである。受動的なのは、あくまでも意思・狭義の意識・自覚のレベルでの話である。

怒りの感情は、意思してその対象に能動的に破壊作用を及ぼすし、喜びは、獲得という能動性によつてなり、その将来の自主的使用等を慮っているが、驚きは、これらの感情と違って、没意思的に、一方的に対象に規定され、他人任せの受動性に徹底しているのである。ヘーゲルは、驚きのもとでは、驚く者（理性的存在者）とそれに疎遠な驚きの対象（自然）との区別が特徴的だといっているが、驚きは、私の身体と対象とのかけ離れた距離を前提にするものである。驚きの感覚は、「眼を見張り」「耳をそばだてる」というように、遠隔受容器であり、驚きは未知の不可解なもの・疎遠なものについて、その異質異様なものを**実在的 (real)**には遠方にあるが、**ま**まにして、その表象のみを**観念的 (ideal)**には無抵抗に**受容し**、心中に飛び込んでくるものをそのままの形でとらえようとするのである。そして、この観念的な全面受容のうちでは、こちらからの能動的影響は、これを憚っているとさえ言えるのである。この凝視は、それに怒りや恐怖など他の感情の混入のない限り、この私にとり未知の世界を、息も吹きかけることのないように（自身が攻撃や逃走の能動的な態度を取ることなどなく）、ガラスで仕切られた別の世界から、或は（汚れない眼のみを飛翔させつつ）星の高みから、淡々と眺めているのである。その対象をどう

かしてやろうなどという雑念を一切持つことなく（というより、麻痺させられていて）、純粹な注視・凝視に徹底しているのである。他事を放擲させられているから雑念を抱き得ないのであり、純粹性を強制されているのである。但し、この純粹な凝視は、端的な受動性にあるから、分析しないことを、その一大特色とするのである。新奇なものが与えられた時、能動的な好奇心や注視は、それを分析し、部分に分け、それらを比較し、隠されたものを想像していくのであるが、驚きは、そのような部分や隠されたものに思いを巡らせることはしないのであり、眼前の現実に関われ切って、能動的意思的な想像・妄想などを一切しないのである。与えられたものをそのままに、丸ごと未分的に、全体を全体として総合的に非分析的に受動的に直観するのみである。

二 シ ョ ッ ク

驚きは、まず何よりも凝視の眼を特徴とするが、強烈さへの反応では特にもう一つ、衝撃・ショックという反応が目立つ。身構えを欠くところへの強烈なものの奇襲・不意打ちに、人は、客観的には大したものではなかったとしても、主観的には激しい衝撃を被って、打ちのめされるのである。我々は「胆を潰す」というが、驚きの衝撃に人の心は、叩き潰され、その活動・機能は一時的に破壊され停止してしまふのであり、その結果として意思的活動は麻痺してゼロの状態になっているのである。ドイツ語の驚きに *Bestürzung* というのがあるが、それは、*stürzen*（突き倒す）に由来する。驚きは、人を突如、突き倒すのである。驚きの対象は、私の平常の連続的な生の営みを、突如、外から超越的に強圧的に突き倒し中断させるのである。驚きの対象の強烈さは、人の感受能力の限度を踏み越えていて、計量の指針を振り切って、この心的能力を無能とし、この生体の活動・機能に一瞬打撃を与えるので

ある。

とすると、先の驚きの凝視は、計量機能を壊すほどの強烈なショックを伴うものの場合、冷静な計量のもとでの注視ではありえず、その限りでは驚きは、正確で冷静な認識の遂行過程と見てはならないのであろう。打ちのめされてショックなものを呆然として見続けるだけである。凝視は、強烈さのショックが圧倒的になってこれまでを侵すほどになると、当然ながらゼロとなるのである。しかし、どんなに衝撃に踏み潰されて生理的なショックに陥るような場合でも、凝視がなくなつたとしても、意識がショックを感じ、受し続けているのなら、それはやはり驚いているのである。心身への強烈な作用の到来を衝撃として受け止めて、これに度肝を抜かれ、雷に打たれたように驚倒しているのである。急激で極端に強い作用に、穏やかなものへの穏やかで繊細な構えは、萎縮し或は凹まされ、その機能・活動を叩き潰されてダメージを受けるのである。

ところでこの驚きのショックは、いわゆる生理的なショックの虚脱状態と、かならずしも同一視されるものではない。いわゆるショックの場合は、心身の活動を停滞・停止させて、多かれ少なかれ「仮死」状態に陥り、自己は世界とのつながりを失ってしまう。が、純粹な驚きの場合は、一般的に（ショックによる麻痺がその認識機能までを侵すことがなければ）、強烈な打撃を与える世界とのイデオールなつながりを逆に強化して、驚きの対象を凝視しようとするのである（いわゆるショックでは、意識がはっきりしていたとしても、驚きのように、受動的注意集中としての凝視の態勢をとることはない）。更に、驚きのショックは、持続性を欠く点でも、一般のそれとは区別されよう。生理的なショックのいわゆる「仮死」状態などは、かなり持続し、かつ心身の全体に及ぶことが一般的であり、場合によると不可逆的に、真の死に向かっていくのであるが、恐怖あたりの混ざっていない純粹な驚きに

おけるショックは、短時間の麻痺に留まって、これをあまり持続させないのである。驚きの場合には、身構えがゼロだから、心身の中心部分まで衝撃が及んでいるのだが、この衝撃は、真に心身に強烈な打撃を与える生理的ショックに進展しない限り、瞬時の間、機能停止をもたすだけであって、直ちに立直り身構えることの出来る能力を残しているのである。

ショックを与えられ、奇襲に打ちのめされて、驚く者は、心身の意志的能動的な諸機能を麻痺させ、半ば「仮死」状態になり、全面的に受動状態となっているのである。驚きの対象に完全にのみ込まれて、その限りではそれに疑惑の眼を有することもなく反抗心のかけられもなく、与えられたものを与えられたままにして従順な受容に留まっているのである。疑惑どころか、他事全般への意識そのものが中絶しているのであり、生の空白・真空状態がそこには現出しているのである。その麻痺は、徹底していて、他事は勿論、自己を振り返る意思すらも奪っており、従って、驚きのうちでは、麻痺し空白を強制されていることの自覚自体が存在しないのである。その空白に気付くのは、驚きから解放され、「我に帰って」からのこととなる所以である。既知のものと自己が未知の圧倒的なものによって、言わば否定されているのであり、その空白は、時に人をして無力感を抱かせることになるのである。

スピノザは驚きを、精神が新奇な表象に「しばられたままである」状態だと捉えているが、驚きでは、驚きの対象の凝視によって精神の全エネルギーがその対象に抱束されて動けなくなっているのである、且つショックで他の方面の活動が全面的にストップしているのであって、端的に不動の態勢をとることになるのである。我々の意識は、始終動いているものなのに、それが見られなくなつて、「時間のうちの転変の停止」(フィヒテ)⁽⁷⁾という不動の異常事態が生じているのである。ドイツ語の *Staunen* (驚き) は、*starr* (硬直・不動) によるもののようである。

が、驚きは、人に打撃を与えて、心身の機能を麻痺させ虚脱状態を作りだし、その生動性を奪い、不動の姿勢をとらせることになるのである。但し、恐怖の不動（擬死的反応）がかちかちに化石化したものであるのに対して、その混じっていない純粋な驚きの不動は、単なる麻痺としては、リラックスしたものとなっているのである。恐怖の不動は、後に大変な疲労を残すのに対して、純粋な驚きの場合、さわやかな余韻を残すことができるのである。

驚きは、この不動の方面からは、「目覚め」とは反対になり、よっぱらい眠り込むことだと言われなくてはならないであろう。覚醒状態では、習慣化のまどろみのなかでも、不注意なボーっとした場合でも、なお精神は、心身をその場に必要ない限りにおいて緊張させているのであって、口を開けた弛緩状態になることは一般的ではない。だが、驚きは、凝視してもその裏面で、通常の覚醒状態では考えられないほどに心身の活動の麻痺をもたらすのである。驚きの衝撃に打ちのめされて、衝撃への自覚を除いて、心身は、一時的な気絶（stun || 驚き）状態に陥っているのである。カントは、驚きをこの方面から捉えて、「瞬間的に襲う眠り」だとか「酩酊」という形容が可能と見ているが、⁽⁸⁾驚いたとき我々は、他事への意識は全く停止し、突如としてそれに関しては眠りへと襲われるのである。ふと我に帰ったとき、その間心身がどの様であったかの記憶を持たないほどに無意識化し不動に停滞していたのであって、まったく「酩酊」して泥酔状態になっていたとさえ言うことができるのである。

驚きは、単純化していうと、新奇なものへの認識衝動である凝視の面と、その強烈さにショックを受け心身を麻痺させる面の、覚醒と眠りの弁証法的な二側面からなるのだといえようが、前者は常に何らかの形で後者を伴うのに対して、後者はそれが主要なものになった場合、前者をしばしばゼロにしてしまうのである。凝視そのものをショックの麻痺が襲うのである。自動車事故などでの驚愕体験は、まず迫ってくる車を凝視し、ぶつかってショッ

クの驚きを受受し、そのショックが麻痺を作り出して、意識の方面までこれが浸透し凝視やショックの自覚がなくなると、もはや驚きとしては感じるものが出来なくなつて、ショックの後のことは全くどうしたか憶えていないというようになり、驚きではなくなつていくのである。

凝視のモメントは、いくらこれが大きくなつて「眼が飛び出す」ほどになつても、驚きであることをやめることはないが、ショックのモメントの方は、「肝を潰し」て意識の機能全般をこれが侵すように大きくなると、意識が無となり、驚きの感情が無化してしまうのである。驚きが驚き自体を潰してしまうのである。ショックは、驚きの自己廃棄的なモメントと化しているのである。大きな自動車事故などでは意外に驚きの体験は大きくなく又はつきりしないが、それは、この自己廃棄的レベルにまで達したためであらう。

三 忘 我

意識集中＝凝視と、ショック（それによる麻痺・不動の）姿勢という二様の態度を、驚きではとり、時には凝視の面までも麻痺が襲うことにもなるけれども、普通にはこの二面は、並存しているのであつて、眼を丸くし、じつと見つめながら、意思的活動・機能については、概ねこれを麻痺させ不動の状態をつくりだすのである。驚きのこの態度は、注視する眼のみが驚きの対象へと飛翔し、自己の心身は無化（麻痺）しているものとして、没我性・無我性・忘我性といった規定からも捉えることができるであらう。驚きの忘我性を我々は、「たまげる」とか「呆っ気にとられる」という表現に見出すことができる。そしてたまげた後、再び「我を取り戻し」「我に帰る」ということになるのである。驚いて魂の多様な活動をふっと消される状態が「たまげる（魂消る）」ことであり、この場

合、魂は失神し麻痺する面があるのだが、良性の「たまげる」状態での驚く者の主たる体験は、自己の魂が、驚きの対象にと飛翔して、これと一体化することであり、その結果として平常の多様な意識のある場所ではこれが不在になる（魂消る）ということになっているのである。呆っ氣にとられるとは、大きくあけられた眼が驚きの対象に吸い付けられ、自己の気_レ意識がそこへと忘我的・没我的に飛翔して、口はポカンと開けている（呆という漢字を眺めていると、それが見えてきそうである）、声を出せばア音になるような状態であろう。

我々の意識は、通常、確固とした自己の存在を基軸にして、主体たることを繰り返して自覚し確認しつつ世界へと関わっているものであり、世界は、この生動的で実在的な主体に対峙した客観として現れるのである。が、驚きでは、普通、自己が、凝視の一点を除いて機能を停止し無化して、自覚（自我）がなくなり、忘我的となるのである。驚きの凝視は、その存在の土台としての欲望等からなる多彩な実在的で生動的な自己を失っているものであり、凝視する時点で（その眼に）存在しているものはいえ、驚きの対象のみである。小賢しい自我は没しており、無我・没我となるのである。純粹な凝視にとって、生動的な実在的自己は、はるかに遠いものとどまっています。無であり、これを振り返ることもないのに対して、その対象は、それがこの私と異質で実在的には疎遠な存在であることは重々承知しつつ、強烈で、眼を引き付けてやまないものとして、引かれる眼には、観念的には、ごく近くに引き寄せられたものとして現れることになるのである。驚きの始めには遠くにあり、実在的には依然として遠いものが、驚きの結果、観念的には至近距離に位置することになっているのである。逆にいうと、生動的な実在的自己が麻痺し無化することで、凝視の眼（観念的自己）は、現実的肉体的な絆から解放されて、驚きの対象へと飛翔することになっているということが出来るのである。

我を忘れきった驚きのこの飛翔した姿は、テレビに見とれて魂を奪われたようになっていく子供の在り方あたりに酷似している。テレビの前の子供は、注視する眼以外の心身の活動を概ね停止し、ほぼ全面的に受動的になりきり、所与の全体を未分的に非分析的にポカンと受け入れるのみであって、能動的な態度（批判や分析）は、欠落させているのである。何よりも、映像であるから、これに実在的自己とその活動は本気になってはならないのであり、豊かな自己を喪失して関わりなくてはならないのである。映像に見合う観念的な眼だけが生き生きとテレビに引き付けられて、これに飛翔し一体化しているのである。驚きでは、実在的な自己は麻痺して、実在的には遠方にあるものに観念的な凝視のみが生動的になっているのであるから、テレビという非実在への観念的凝視とかなり似ている訳である。が、テレビでは驚きほど徹底した自己の無化はなされてはいない。また持続性の点で驚きとは大きく異なるのである。驚きは、新奇性を失えば、つまり既知化するなら終わりとなり、持続性を欠いているのであるが、テレビは映像だからずっと実在的な自己は無化していなくてはならないし、それへの吸引は、新奇さのみでなく、逆に周知の自己の願望等の表現されたものとして、（驚きの対象が疎遠な非我であるのと違って、自己自身の理想等）身近なものにもよるのであって、その眼は、驚きのように純粹ではなく、もの欲しそうな眼つきなどにもなっている、かなりの持続性をもつのである。

ギリシャのタウマ（驚き）神は、海神ポントスの子であり、タウマの兄弟も海の種族に属する。しっかりと安定した、馴れ親しんだ大地に対して、海は、陸上の生物である我々には疎遠で不気味であり、また、未知の国から新奇なものがやってくるのも、この海を通してであった。ヘーゲルは、ギリシャの古代は、それ以前が自然に埋没し自然と直接的であったのに対して、人が自然から分離し、これを自己と異質の「疎遠なもの Fremdes」と捉え、

つまり「自然の自然的なもの」に「驚嘆 Verwunderung」の眼を注いでいるのだといっているが、驚きの対象は、この自我に疎遠で未知の、端的な「非我」として到来しているのである。驚きの眼は、海のように不気味で疎遠な非我を前にして、これに一人乗り込んで行くところの斥候である。このタウマ（驚き）神の娘にイーリスがいるが、彼女は、天と地を結ぶ虹の神である。天という我々に未知で驚嘆をよぶ異質のものを、我々地上のものに結びつけ、指し示してくれるのであり、また、このかけはし自体、稀れにのみ姿を見せ、従って現れる度に新奇さを抱かせるものなのである。驚きの対象は、新奇で疎遠なものとしてなお自我の汚れがついていないのであり、初々しさをもつて人を引き付けるのである。この虹に驚嘆する時、我々は、これに引き付けられ、地上の重々しい現実を放棄し麻痺させられて、そこへと飛翔し、これに呑み込まれ、一体化していく。この場合、地上の自己は、そのままに麻痺し不動となり、実在的な方面からは何の束縛もなく自由になって、夢見ているように、ひたすら注視するのみの魂がそこへと抜け出し、虹そのものになっていくのである。カントは、驚きではその「知覚が醒めているのか夢見ているのか不確実」だと言っているが、そういうところがあるのである。

驚きによるイデアールな飛翔は、一瞬のことで、はかないものであるが、驚きの対象への、脱自的な一体化であり、エクスタシー体験でもありうる。奇蹟（Wunder）に驚く（verwundern）ものは、この愚かしい俗世界にしながら、その奇蹟を通して、驚きのショックにこの肉体を麻痺させ忘却し、他事を放擲して、驚嘆する無垢な眼を遙かな聖なる世界へ向けて、魂のみを、そこへと飛翔させているのである。この飛翔の瞬間は、世俗の時間を麻痺させストップさせたものとして、超時間的であり、ここでの驚きの瞬間は、極論するなら、世俗のうちに現れた「永遠」だと言っても良いであろう。だが残念ながら、この飛翔は、世俗の時間にとっては、いかんせん瞬間であ

り、無に等しいのである。この驚きは、神（とか内なる神性）からの賜物として、我々が決して創造できるものではなく、人は、これに受動的にのみ関わることが出来るのである、受容できるのみである（但し、そういう飛翔のための条件を難行苦行はつくり出しうる）。さらにこの驚きでは、奇蹟を人知に不可思議で、解明不可能なものとして捉えて、そのショック（麻痺）を懷疑的精神にまで浸透させ、この活動を一切断念していくのでもある。

これに対して、「平常のものや日常のもの」への驚き（ショーペンハウアー⁽¹⁾）としての哲学的な驚きは、世俗のうちでの驚きとして、人が、これに能動的に関わっていくことが可能である。勿論、驚くこと自体は専らに受動的で無批判・未分析的なのであるが、驚きを生ずるところへと自身を導いていくことが自己の意思によって決定できるということであり、しかも、奇蹟への態度と決定的に異なるところは、驚きに引き続いてこれを起因にしてこの世の理屈を構成して知的活動への覚醒（懷疑精神の鼓舞）をこの驚きがなすということである。驚き自体は、奇蹟への信仰の場合も、不可思議なものへの懷疑（哲学的好奇心）も、他事放擲の純粹飛翔として同一であろうが、驚きを包み支えるものが両者では違っていて、哲学的な驚きでは、この驚きという我を忘れての瞬時の飛翔からさめ、とともに、さめた元の状態が懷疑精神であるが故に、その飛翔先（新奇で不可思議なもの）までへの既知世界からの道程を、この世に属する理性のもとで知的に解明して媒介して行くのである。根源に旺盛な懷疑精神があり、知的な確固とした態度があつて、その上で驚きがこれを鼓舞することになっているのである。

この飛翔・他事放擲の忘我性は、それに恐怖等他のマイナスの感情が混ざっていない場合、爽快なものである。驚きは、人を日常世界のしつこい煩わしさから忽然として解放してくれるのである。それは、永い苦痛が急になくなった無のすがしさである。この世界の煩わしさは、忘れようと意志しても、執拗に自己にまとい付いて離れ

ないのであるが、驚きは、これを突然に麻痺させ無化してくれるのである。日常性に閉じ込められた心身を、「脱落」させてくれるのである。見る意志は、小賢しい欲望等の眼で見るが、驚きの凝視は、この意志をショックで麻痺させながら、純粹に何かを見させるのである。小賢しきのない澄んだ眼に、驚くべきもののみがはっきりと見えるのである。勿論、それは、つかのまの解放・息ぬきに留まるのであって、持続性もっていない。驚きは、陳腐な既知の日常世界を突然放擲して、新奇な別世界へ飛翔し、これをかいま見せてくれるのであり、爽快であるが、これを見てしまうと、早速に既知化して終焉を迎え、精神は、すぐに陳腐な惰性の日常世界にと連れ戻されるのである。

なお、凝視に引き続いて対象を能動的にさらに見続けていく場合があるが、驚きの凝視は、我を忘れ、没我になっっている間のみがそうだと言えよう。我（意思）を取り戻して引き続いて見る段階になると、驚きの凝視ではなくなっているのである。それは、時には想像力によって隠されたものを見極めようとする鋭い眼になり、或は、睨み付けたり見守る眼に変様するのであって、驚きの無垢で爽やかな全面受容の眼ではなくなっているのである。奇蹟への凝視や心身放下の凝視は、驚きの凝視の後に、驚きを切っ掛けにして、純粹な法悦の凝視を続け、そのまま天上に、悟りの世界に舞い上がったままになる状態をつくりだせるものようであるが、そこでの眼は、テレビの前の子供と同じように次第に虚ろになっていくのであり、親密な理想世界に浸り切っていくものとして、疎遠なものへの驚きの凝視とは別のものになっているのである。

四 動 転

驚きにおいては、新奇なものの奇襲があつて、既存の構えは、用をなさず無効となる。既存の構え・活動は、概ね、麻痺させられるのであるが、それに何らかのエネルギーが存続している場合、それは行き場を失い、出口を求めて、うろたえ動転することになる。或は、素早く蘇った意思が心身の他の部分に命令しても未だ麻痺して思ひにまかせないとすると、この意思是、当惑の様相をとることとなる。但し、動転・当惑は、能動的な（且つ無思慮な）働きであるから、本源的に受動的である驚きにおいては、その全てにこれがある訳ではないし、また、驚きの諸モメントのうちでは、若干遅れぎみに生起するものになるのである。まずは、驚くべきものの出現を受動的に凝視し、これに衝襲・ショックを受け、呆然とし、その後、若干意思が残っていたり回復すると能動的になつて、動く必要を感じて、不随意な心身をさげ新規の身構えを搜してうろたえまわる訳である。

新奇なものは、既知の体系からの構えを拒否しており、従つて、驚いている時点ではそれへの対応策はなお存在しておらず、それに対して構えを搜し選択しなくてはならないとすると、さしあたり無規定的な構え一般に留まつて、方向の定まらない盲滅法な動きに終始する以外にないということになる。突然に、未知のものに対応を迫られるのであり、一步退いての配慮など不可能であつて、盲目的で無思慮なものとならざるを得ないのである。驚かすものは、強烈で、無視不可能であり、かつ不分明であるから、それに対してエネルギーを注ぎ込むことが求められながらも、そのために必要な能動的な分析等を一切しないから、どのように注ぎ込むかについては分明でないのである。どうして良いのか分からないが何かをしなくてはならないと、強迫的で不合理な行為に向かい、兎にも角も

激しさに見合うような激しい反応一般を表出して、どぎまぎし無意味に「あわてふためく」のである。

新奇なものを前に、新規な構え・対応を捜して、手当たり次第に当てずっぽうの錯誤を繰り返すのであるが、一瞬でも妥当な構えが出来るとその方向に自動的に進んでいくことになるもの以外では、適切な新規な構えであることを検証する余裕が回復するまでは、たとえ妥当な構えがなされても、これに気付かず別の構えへと次々に移行行くことになる。捜すという反応形式はとっているのであるが、強烈さに、冷静な判断能力を麻痺させていて肝心の検証という反省的機能が働かず、そのあわただしい捜査は、盲滅法の空回りに終始するのである。単純なものの場合、正解と誤りの往復運動を驚いている限り続けるのである。

さらに、動転・当惑は、麻痺して自由にならない心身の各部分への、自己自身への戸惑いなのでもある。日頃は自在に動く手足なのに驚きに麻痺して全く動かず、驚きの中で能動性を發揮しはじめた意志は、困惑してしまうのである。正座をさせられし、びれをきらして、立ち上がる意志はあるのに足が言うことを聞かず、両手をついておろおろするあの当惑であり、しかも驚きでは、このしびれた足に「疾走しろ！」と命ずるのである。命令をする意志は、何とかしようと足にあれこれ働きかけ、或は別の可能性を探って手に足の代わりをやらせてみたりして、焦燥し、あわてふためくのである。

意思是、新奇のものを何とか既存の体系のうちに位置付けようと知性に働きかけ、新奇なものの上に置かれるべき既知の体系を想起・想像させようとするのだが、なおこの想像力・記憶力が麻痺しがちであって、新奇の表象をさげて何処にも置くことが出来ずおろおろしているのである。或は、とられるべき身体的な構えは分かっているのだが、肝心の身体が動かないで、そのギャップにまごつくのである。何とかあるべき構えの方向に身体を動かそう

と慌てふためくのである。気持のみが先に進んで身体がついていけないのであり、やみくもに、無闇に意思は力んで焦り大騒ぎをするのである。

カントは、驚き (Schreck) について、Fassung (把握・落ち着き) を失ったものとか、Verlegenheit (置き違え・困惑) とも規定できると見ているが、驚く者は、反省・検証といった余裕のある把握が出来ず、正解に気付くことなく置き違えを繰り返し、目覚めている意思是、自己の麻痺している心身を思うように出来ず、気のみが焦り、落ち着きを失って、おどおどとうろたえ困惑するのである。

驚きの眼は大きく見開いており、新奇なものはしっかりと見えているのであるが、これへの新規な構え・反応の在り方からいうと、既存のものが無用となって、猶、新規な構えは不明なのであるから、それは、見えていないのである。「めんくらう」驚きは、眼・面に強烈なパンチを食らって、それへの構えができず、その限りではめくら(盲目)になっているのである。我々の漢字に瞿や目を二つ並べた驚きがあるが、これは、目をあちこちに向けてきよろきよろする驚きで、慌てていて、よく見えない状態を指すもののようにである。凝視どころではなくなっているのである。麻痺・ショックの方面が大きい驚きの場合、凝視のモメントは滞りがちで、不分明さに困惑することになる。眼を回し、途方に暮れるのである。凝視の眼は見掛けに留まっています、困惑の眼がここでは支配的となるのである。驚きの表情というと眼球突出のバセドウ病(驚愕バセドウ Schreck-Basedow とも言われる)が想起されるが、この病いは、凝視の見掛けと裏腹に、注意集中困難がその精神的な特徴ともなっていて、混乱・動転の方に近いものとなっているようである。驚きにも、この病いと同様にしばしば落ち着きのなさ・当惑・動転が存在するのである。

この困惑においては、差し当たりは、驚きは、なお新奇なものに対する實在的な拒否の態度となっているのである。構えからは、これを受け入れる態勢が出来ていないのであるから、少なくとも保留の状態にあるのである。イデアールな凝視の眼は、驚きの対象を無批判的に全面受容しているのであるが、實在的に身構え等を捜す困惑の眼は、驚きの対象の實在的疎遠さに直面しており、且つイデアールにも（分析等の能動性がなく）詳細は不明で、實在的には近寄せることは出来ないものであって、「眼を疑う」という驚きの状態に留まるのである。心身は麻痺して動かないのであって眠っているのと同じで、實在的には受け付けないのであり、動転・当惑の状態においては、さしあたりはこれを保留し、事実上は、拒否することになっているといっても良いであろう。ヘーゲルは、驚嘆の対象にかかわって「魅了 *anziehend* と反発 *abstoßend*」を言及しているが、⁽¹³⁾魅了されたイデアールな凝視の眼と、反発し動転したレアルな困惑の眼が、ここにはあるといっても良いのであろう。

實在的にどう構えて良いか不明で、しかも強烈な驚きの刺激に見合うような激しい反作用の指令がうちに湧き上がっていて、且つ指令される者達はお夢うつつなのだとすると、この活動は、方向の定まらない混乱・動転・めまいといったカオス的狀況に陥ることとなるのである。そして、この動転が焦燥・混乱をもって沈着な解明を一層妨害することになり、一定時間、動転を持続させるのである。圧倒的なものを前に「慌てふためき」「驚き惑い」「眼を回す」のである。「素問」のいうように驚きでは、日頃の靈妙な精神も思慮分別も失って、心は「定まるところがなく」端的に「氣が乱れる」のである。⁽¹⁴⁾或いは、ヒュームの言うように、驚きは、精神を「興奮 *agitation*」の状態にするのであり、⁽¹⁵⁾一定の形式が採れないものとして、言わば純粋興奮となつていのである。形のない運動であり、混乱のままのエネルギー流出である。相対的な安定状態にあるところに突然奇襲があり、そのささやかな

安定が破壊され、混乱が、気の乱れが生じているのである。

五 結び（驚きのコントロール）

驚きは、好き嫌いのようにその対象の表象を眼をつむって想起するだけで湧出して来るようなものではない。原則として、自己を越えたところから、疎遠なものに奇襲されるのではなくてはならないのである。だが、だからといってこの感情を私達がコントロール出来ないということにはならないのであって、自身で驚きを生じさせることは困難だとしても、人を驚かせることは易しく、子供にもできることである。では、人を驚かせ、また逆に人や自身を驚かせないようにするには、どうしたら良いのであろうか。驚きは、「思いがけないものに、びっくりする」こととして、「思いがけない」と対象を捉えるところの認識作用的な側面と、「びっくりする」心身の反応＝実践的側面がある訳だが、それらの成立を促進したり阻止したりすることが出来れば、驚きそのものをコントロール出来ることになるのである。

まずは「思いがけない」ものと捉えることに關していうと、驚きは、新奇・強烈・突然・意外等の形で対象が現れることで成立するのであるから、驚かせるためには、これらの規定を満たすようにすると良いのである。旧知・既知の日常性を打破することが出来るように、新奇で異常なものを用意することであり、新奇なものが出せないなら、新鮮さが感じられるように旧知に属するものを、忘却した頃、たまに、稀れに提出するといった工夫をするのである。

さらに強烈さが与えられるなら、しかも、強烈さをそれとして感受させるために、それを突然に提示できるなら、

確実に驚かすことができるのである。人を驚かす悪戯のオーソドックスなものは、大体、この強烈さと突然性を使ったものである。新奇なものは、これを作りだすのに手間・暇がかかるのに対して、強烈さは、既知のものであっても量的に多・大であれば良いのであるし、突然性は、提示の仕方を工夫するだけで済む問題であるから、利用しやすい訳である。びっくり箱は、この強烈さと突然性を使って驚かす代表作であろう。さらに、意外さも、相手の予期・予想を別の方向に誘っておいて、それに反するようなものを提示することで簡単に作りだせるので、悪戯ではしばしば利用される。

逆に驚かないようにするには、思いがけないといったことになるのを避けるために、媒介性・漸次性等が保たれるように工夫すると良いのである。新奇なものも強烈なものも、それに予め身構え・対応する準備が整っているならば、驚かないで済むのである。新奇なものは、既知・旧知のもとでの既存の対応で間に合わないから、これに戸惑い慌てるのであり、既存の態勢と新奇なものを結んで、既知のものから連続的に新奇なものに移行できるならば、驚くことはないのである。強烈なものにしても、その予徴・兆候が示されて、これを媒介にして予め身構えて、知覚の感度をぐっと下げておくことなどが出来るならば、驚かずに済むのである。

他方、驚きの反応・態度に關していうと、新奇で強烈なものとの認識・判定はなされても、心身がそれに対して「びっくり仰天する」という態度に出なければ、驚きの感情は成立しないのである。とはいえ、驚くべきものとの判定・認識がなされると、半ば自動的に、覚醒している心身はそれに反応して「びっくり」するのであって、その反応を小さくすることは出来ても、全く驚かないでおくということは難しいようであるから、何といっても、感受の幅を大きくし感度を調節して驚きの対象に關わるように配慮することである。が、たとえ「驚くべきもの」と

の認識が成立しても、これに過敏に身体が反応することのないような、のんびりとくつろいだ状態にして置くなら、驚きは、必要なら小さくて済むはずであろう。益軒『養生訓』のいうように、気の乱れの驚きに対しての養生は、「気を調ふる」ことであり、「気を和げ平かにする」ことにあるのである。⁽¹⁶⁾ 極端には、身体を予め麻痺させておくと、驚きの（身体の反応を不可欠の要素とする）感情は成立しないのである。逆の場合、緊張させ、いらいらさせておけば、心身は過剰に活動準備状態になる訳で、驚きの反応も大きく速くなるのである。暗闇の中で緊張しておれば、ほんの僅かな異常にでも驚くことができるのであって、夏の夜の「肝だめし」は、奇怪さ・強烈さの細工であることはいうまでもないが、不気味な雰囲気をつくりだし驚くものの反応の過敏状態をさそう工夫も凝らしているのである。

強烈なものを突然与えるなら、驚かせることは簡単に出来る訳だが、驚きは、当人の意思の外にあるものから奇襲されることとして、驚ろかすものによって弄ばれたというような、屈辱的な体験ともなりやすく、またしばしば危険性を過大に見積もってしまつて恐怖等を伴い、「驚ろかされる」と言えば、多くは不愉快な体験になるほどである。従つて、驚かせるに際しては、「思いがけないもの」を用意することと並んで、その手加減が大切となる。相手の感受性の状態と相談しながら、驚ろかす程度に見合った驚きの刺激を与えなくてはならないのである。単に驚きの対象に気付かせる場合・少しびくつとさせる場合・出来るだけ驚かす場合等、驚かせ方とその程度はバラエティーに富むのである。強烈な驚きを与えることは、手加減なく可能な限り「思いがけない」事態を用意するだけで良く、手法としては簡単であるが、手加減の要る方は、その手加減の程度・仕方に種々の工夫が求められることになる。

単に「気付かせる」だけというのであれば、その驚かせ方は、びっくりして不快感が生じるようであってはならないし、かといってその刺激が平凡で、それに気付かずにより過ぎすということになったのでは駄目な訳で、その辺り微妙な判断が求められるのである。目覚まし時計のベルは、本来は、単に気付かせて目を覚まさせる(驚かせる)程度に留められているはずであるが、何かの拍子で過敏な状態にある時に不意に鳴り響くと、不快感を生じるほどに強い驚きを湧出させられる。この点、人に起こして貰う場合は、大抵、気付き具合を見ながら、声をかけ身体を揺すって貰えるので、「気付かねばならないし、びっくりさせてもいいけない」というほどほどの驚ろかし方が、多分快く目覚めることが出来ていたであろうと想像される。ただ、少し気掛かりなのは、この下男はどうやって起きていたのだろうか、ということである。

注

- (1) 驚きの認識作用面については、拙稿「驚きの感情―その認識作用面の分析」(佐賀大学教育学部研究論文集第三六集第一号、一九八八年九月)を参照頂けると幸いです。
- (2) ダーウィン『人間と動物における感情の表現』第二章、驚き―驚愕―恐れ―戦慄(Charles Darwin; *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, 1965. The University of Chicago. (1st ed. 1872). p. 283.)
- (3) スピノザ『エチカ』第三部、感情の定義 四 (Baruch de Spinoza; *Ethica*, Pars III. Affectuum Definitiones. IV.)
- (4) 同前 (ibid.)
- (5) ヘーゲル『美学講義』第二部、第一編、序論、区分 (G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden* (Suhrkamp Verlag), Bd. 13. S. 408.)

- (6) スピノザ『エチカ』第三部、感情の定義 四 (Baruch de Spinoza; *Ethica*. Pars III. Affectuum Definitiones. IV.)
- (7) フィヒテ『全知識学の基礎』第二部、第四章 E III (*Fichtes Werke*. hrsg. von I. H. Fichte. Bd. I. S. 217.)
- (8) カント『人間学』アカデミー版、第二六節 (Kant; *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. Akad.-Ausg. § 26)
- (9) ヘーゲル『歴史哲学講義』第二部、第一編 (G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden* (Suhrkamp Verlag), Bd. 12. S. 288.)
- (10) カント『人間学』アカデミー版、第七八節 (Kant; *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. Akad.-Allg. § 78)
- (11) ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』続編第十七章 (Arthur Schopenhauer; *Die Welt als Wille und Vorstellung*. Band II. Kap. 17.)
- (12) カント『人間学』アカデミー版、第二六節 (Kant; *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. Akad.-Ausg. § 26)
- (13) ヘーゲル『美学講義』第二部、第一編、序論、区分 (G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden* (Suhrkamp Verlag), Bd. 13. S. 409.)
- (14) 『黄帝内経素問』卷第一、編第三九(拳痛論)
- (15) ヒューム『人性論』第二卷、第三部、第五節 (David Hume; *A Treatise of Human Nature*. Book II, Part III. Section V)
- (16) 貝原益軒『養生訓』卷第二

付記 本稿の要旨は、第二回大阪カント・アーベント(一九八八年七月九日、大阪大学文学部)で口頭発表した。

(佐賀大学教育学部助教授)